

ルーチョ・フォンターナのネオン作品と未来派の記憶
—エンリコ・プランポリーニによる展示装置との関係を中心に—

巖谷 睦月 (東京藝術大学)

ルーチョ・フォンターナ (一八九九～一九六八) の作品について考えるとき、欠くべからざる要素の一つとして「光」が挙げられる。一九四八-四九年の《ブラックライトの空間環境》をはじめとして、一九五一年の第九回ミラノ・トリエンナーレにおいて発表された《ネオンのアラベスク》など、この作家には光を扱った作品が多くある。本発表ではこの《ネオンのアラベスク》を中心に考察をおこなう。

この作品の誕生の背景としては、フォンターナが一九四〇年代に戦火を逃れて戻った母国アルゼンチンで親交を持った作家、ギウラ・コシセによるネオンを使用した作品の存在がドミニク・リコワによる一九八七年の論考などで指摘されている。フォンターナが《ネオンのアラベスク》を制作する際にコシセの作品を念頭に置いていたであろうことは両者の間でやりとりされた書簡からも確実である。しかし、フォンターナの作品とコシセの作品には「光源そのものを提示する」という重要な共通点があるものの、その形態の特徴や設置の方法などに大きな隔りがある。

発表者はこれまでに、《ネオンのアラベスク》の展示された第九回ミラノ・トリエンナーレで発表された『技術宣言』の内容との関係に着目し、「空中を飛ぶものの軌道」を表現する《ネオンのアラベスク》の着想は一九三〇年代の未来派によって提唱された「航空絵画 (aeropittura)」の表現と近いものであることを述べてきた。過去のフォンターナ研究においても、エンリコ・クリスポルティをはじめとする複数の研究者によって未来派の芸術理念が空間主義に影響を及ぼしたという事実は指摘されてきたが、具体的な作品をとりあげての影響関係に踏み込む言及はあまりなされてこなかった。

今回、この作品の発想の源泉として新たに、未来派の作家であるエンリコ・プランポリーニ (一八九四～一九五六) の展示装置をとりあげたい。プランポリーニは一九三一年に「航空絵画宣言」に署名した作家の一人であり、一九三二-三三年に描かれた《航空協会のための装飾及び家具の備えられた部屋のプロジェクト》のような飛行機の軌道を立体的な曲線で表現する作品や、一九三八-三九年に制作された《「イタリア産鉱物のアウトタルキーに関する展示」における「水銀のパビリオン」のセット》のように、ネオンを使用した展示装置を制作している。これまでフォンターナとプランポリーニの関係が具体的に論じられることはなかったが、両者はともに一九三〇年代にアルビゾーラ・マリーナにおいて未来派の陶製作品作家であるトゥーリオ・マッツォッティの工房と関わっていることや、一九三五年にアブストラクション・クレアシオンに参加していること、また一九三六年の第六回ミラノ・トリエンナーレに参加していること、そして一九四二年のローマ万博のプロジェクトに作品を提供する予定であったことなどもあり、互いの作品を目にする機会は多かった。三〇年代のプランポリーニによる展示装置をふまえ、五〇年代に《ネオンのアラベスク》のような作品が生まれるに至る経緯について詳しく述べていきたい。